

## 総括と今後の課題

徳丸 吉彦

私は博士後期課程では、国際日本学の日本分析論講座に所属していますが、前期課程では人文学専攻の音楽表現学コースに、そして学部では、文教育学部の芸術表現行動学科の音楽表現講座に所属しています。このことからお分かりのように、国際日本学の研究者といっても、私の主な領域は音楽学です。したがって、これからお話することには、日本音楽の研究者としての経験と、アジアの音楽に関する国際的な協力と共同研究をしてきた経験とが、強く反映していることを、まずお断りしておきます。

まず、「総括と今後の課題」を話すようにとの司会からの宿題に対して、私は、次の4つの点でお答えしようと思います。それらは、実は相互に深い関係をもっていますが、便宜的に4つに分けることにします。1) 日本における日本文化の活性化。2) 外国における日本文化の活性化。3) 日本文化を世界の文化の一つとして意識する態度の形成。4) 日本学研究における中心と周縁の区別を無くすこと。

### 1) 日本における日本文化の活性化

日本学の研究対象は日本文化ですが、それは「かつてあった」日本文化だけでなく、「現存する」日本文化でもあります。古典芸能一つとっても、その伝承が今に生きていなければ過去の研究も充分には行えません。しかし日本文化のさまざまな面の伝承が現在では危ない状態になっています。私の専門の邦楽でも、50年後までその伝承が確実に行われるという保証はありません。日本の音楽教育は、西洋音楽を盛んにしましたが、邦楽を衰退させました。明治の初めに音楽教育を開始した伊沢修二は、音楽教育の父と評されていますが、それは西洋音楽の立場からのものです。邦楽の立場からは全く別の否定的な評価を出さざるを得ません。この伊沢は今回のシンポジウムでの発表にもありましたように、台湾に邦楽を導入することをせず、西洋式の日本の唱歌を導入したのです。こうした態度は、国内でも邦楽の伝承が弱くなって当然という気風と関係があります。

日本文化の研究者の中にも、日本文化を論じる際に音楽を無視する傾向がありました。試みに『日本文化史』と題された本を見て下さい。音楽の記述がすっかり抜けています。正確には『音楽を除く日本文化の歴史』という題を付けなければならないはずですが。こうした態度も日本音楽の実践を衰弱させる要因でした。しかし幸いに現在は、まだなんとか日本音楽も日本舞踊も実践されています。日本語という文化と同様、音楽・舞踊・服飾などの文化も記録として保存するだけでなく、変化を伴うことを前提にしながら生きた伝承として保存しなければなりません。まず日本文化を日本国内において活性化することが、日本学が発展するための出発点であると考えます。

### 2) 外国における日本文化の活性化

日本文化は日本人だけの財産ではありません。世界の文化の一つとして、世界の人々に共有されるべきものです。この考えにしたがって私は海外に日本音楽を紹介し、日本音楽を学ぶ演奏家を助けてきました。また同じことは他国の文化にも言えますので、私はこの5年間ヴェトナムの宮廷音楽を活性化するために、ヴェトナムの国立フエ大学にヴェトナム雅楽コースを作るお手伝いをしてきました。このような考えは「外国人は日本文化を観察し、それを研究すればよい」という考え方の対極にあります。私

は外国での日本文化の実践をもっと盛んにする必要があると考えています。この点で、すでに大きな実績をあげているのが日本語教育の領域だと思います。これは日本語教育の先生方の大変な努力のお蔭です。ですから、海外で日本語を学ぶ人の数が200万人にも達しているのです。それでは日本舞踊や日本音楽はどうかというと、これは大変寂しいものです。日本での西洋音楽の実践のしやすさに比べれば、海外での日本音楽の実践にはまだ必要な制度化ができていません。例えばお茶の水女子大学には演奏担当の教授が二人います。一人はベルリンで勉強したピアニストで、もう一人はミラノで勉強した声楽家です。こういう具合に、わが国は西洋文化の実践の方法を制度的に取り入れているのですが、ベルリンの音楽院に箏曲を教える先生はいませんし、ミラノの音楽院に謡曲を教える先生はいません。ワルシャワ音楽院ほかいくつかの欧米の大学から、邦楽の演奏家の派遣の要請が来てはいます。しかし今まで日本には自分の音楽を世界に出すという態度が欠けていたこともあって、予算的に制度化が難しいのが現状です。問題はこうしたアンバランスを不思議に思わない日本人が多いところにあるのです。非常に多くの日本人は、日本にはオペラ劇場がないから音楽文化が遅れていると言いました。それを認めたとしても、それならばロンドンに能楽堂がないのはおかしいし、パリになぜ文楽劇場がないのかという発想をしないのでしょうか。

日本文化を世界の人々が共有できるように、外国での日本文化の実践を活性化することを積極的に考えなければならないのです。日本語教育と同じように日本音楽も日本舞踊も、諸外国の教育制度の中にもっと強く位置づけるのは、その一つの方法です。

### 3) 日本文化を世界の文化の一つとして意識する態度の形成

今日の午後のセッション（全体会議・第2部）で、日本の公的機関が日本学の研究にいかに大きな貢献をしておられるのかがよく分かりました。なぜこのような努力を傾けてこられたのかといえば、それは日本文化が日本人だけのものではなく、世界の人々のものでもあるからということになるでしょう。諸外国にも共通することですが、自国の文化を研究する人たちは、自分の文化を世界の文化という広い座標に置く必要を感じないで研究しがちです。日本学の研究者の中にも、自分の書いた日本語の論文の読者が日本人だけだと思い込んでいる人が今でもいるようです。しかしそういう時代は終わりました。

私が関係した具体例をお話します。世界の音楽事典で、大部分で記述のバランスのもっとも良い事典が、1980年に出版された『ニューグローヴ音楽事典』(SADIE, Stanley ed. *New Grove dictionary of music and musicians*. London: Macmillan, 1980) です。この事典の日本語版を作る際に、私は編集者の一人として「中国」「朝鮮」「日本」などの項目は文献を含めて全面的に書き直すことを決定し、またヨーロッパの都市と同じように、アジアの都市（たとえば、「ヤンゴン」）を項目として立てました。英語版に抜けていた日本の音楽家の項目を追加したことは言うまでもありません。こうして日本語版の『ニューグローヴ世界音楽大事典』(柴田南雄・遠山一行(編)、東京:講談社、1993—1995)が完成しました。これを知ったロンドンのニュー・グローヴ編集部は、次の改訂版を作るために日本語の読める研究者をスタッフに加えて、日本語版を参照して新しい項目をたて、文献を加えているのです。このように日本の中での仕事は、今ではすぐに海外でも利用されます。

日本文化が世界の文化の一つだという意識を強化すれば、日本からの発信が増加し、また発信を受け取りやすいシステムを強化することにつながります。学生たちの論文作成の指導にも、こうした意識は

関係してきます。具体例を挙げれば小さなことですが、文献を挙げる際に出版地を抜かすことが、また雑誌論文のページ数を抜かすことが、どれほど海外の読者に迷惑をかけているかを学生に教える必要があります。日本からの発信を受け取るのは、日本文化に関心をもつ人だけではありません。他の東アジアの文化に関心をもつ人もいるでしょうし、非常に離れた地域の文化に関心をもつ人が、日本のことを調べることもあるでしょう。日本文化が世界の文化の一つとして広く認知されるためには、日本学の研究者がこのことをもっと強く意識して、それに必要な手段を講じなければなりません。私は目下、*The Garland Encyclopedia of World Music*. (New York: Garland)の『東アジア』の巻を編集していますが、その目的は、ここに収められる予定の韓国・中国・日本の音楽を、それらの言葉を知らない人たちに英語で読んで貰い、東アジアの音楽を世界の音楽の構成要素として位置づけて貰うことにあります。

#### 4) 日本学研究における中心と周縁の区別を無くすこと

日本音楽の研究が音や楽譜だけでできるわけではありません。例えば出版に関する研究、文学や思想に関する研究を無視しては成り立ちません。誰でも自分の領域を中心的なものと考えがちですが、中心を研究するためには、その外側にある周縁の研究を常時参照する必要があるはずですが、研究者が多い領域は、この点で鈍感になりやすいという欠陥があります。例えば日本学の中でも研究者の数が多日本文学は、自分たちの領域の研究成果だけに頼る傾向があるようにみえます。この欠陥は日本の古典文学の注釈によく現れます。音楽学での業績をちょっと調べれば、間違った注釈を書かないで済んだのに、と思うことがよくあります。もっとも日本服飾史がご専門の小池三枝先生によれば、服飾についての注釈でも同じことが言えるそうです。

音楽学の領域は、その中にいる人だけでなく隣接する領域の方にも役に立つ出版を行うように努力してきました。例えば岸辺成雄博士古希記念出版委員会（編）『日本古典音楽文献解題』（東京：講談社、1987）や平野健次・上参郷祐康・蒲生郷昭（監修）『日本音楽大事典』（東京：平凡社、1989）が良い例で、これらは日本文学の関係者もまず参考にすべきものですが、これらの文献さえ見ないで日本音楽についての注釈を書く人がいます。

こうした誤りを避けるには、二つの方法があります。まず中心と周縁という区別を無くすことです。この意識をもつことによって、関連領域の業績を謙虚に利用する態度が生まれます。もう一つは人と人のネットワークを作ることです。日本学の内部でも、あるいは日本学以外の研究領域との間でも、人間の付き合いによって質問し合える相手を作ることです。

今回のシンポジウムはこうしたネットワーク作りに拍車をかけ、お茶の水女子大学での日本学研究を真に国際的なものにする大きな一歩であったと信じます。